風とたたかう雑草（ざっそう）

の・ちゅうこう

池田仙三郎

風とたたかう雑草

おの・ちゅうこう　作／池田仙三郎　絵

913
おの・ちゅうこう
風とたたかう雑草
講談社　1982
286p　22cm（児童文学創作シリーズ）
おの　ちゅうこう

風（かぜ）とたたかう雑草（ざつそう）

昭和57年9月25日　第1刷発行
昭和58年6月17日　第3刷発行
定価1100円
著　者　おの・ちゅうこう
発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話　東京03(945)1111(大代表)
振替　東京8-3930
印刷所　株式会社　廣済堂
双美印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

© Tyûkô Ono　1982　　Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，ごめんどうですが，小社書籍製作部あてに
お送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN4-06-119056-3　(0)　　(児一)

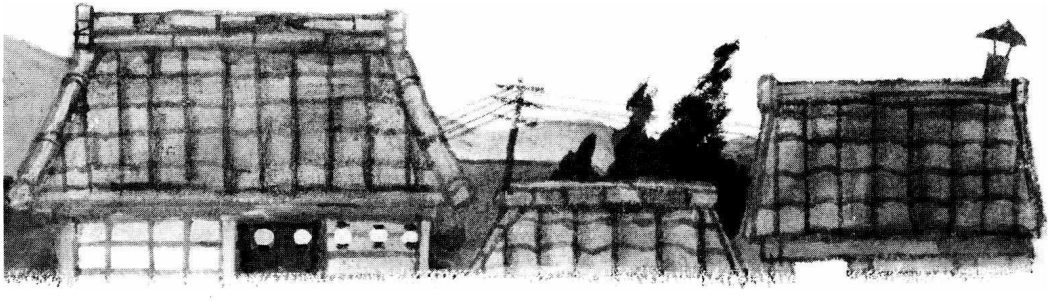
季節労働者で、東京から村へやって来た
井上青年は、ぺうぺうと三郎のノートをめくって、
そこに書かれてある詩を だまって読んだ。

血管は いう
おれは死ぬかもしれない と
ある朝 一升炊きの
かまどの火に 手をかざす

「ふん。おもしろいな。絶望とうめきと貪しさ。
ここには何かある。それが君の詩だ。」
三郎は、大学生の井上さんに ほめられて うれし
くなった。

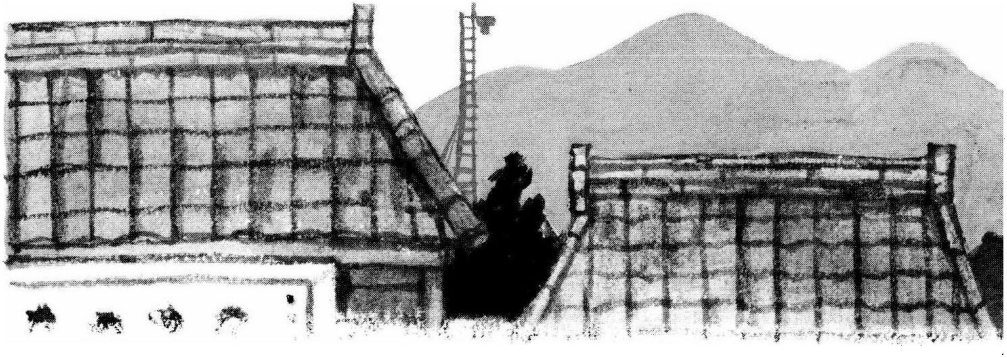
もくじ

第一部
希望のにじ……6
新生の門……33
春のかげろう……60
せみしぐれ……87
雲のゆくえ……115
第二部
野ばらの墓……144
ざわめく風……171



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寄宿舎風景……196
もえる若草……225
鉄けん制裁……252
あとがき……280
「風とたたかう雑草」について…福田清人 282



第一部

希望のにじ

一

三郎は日ぐれどきの道を、家にむかってあるいていた。

十一月になると、もう初冬は目のまえにせまっている。

日がみじかくなったので、四時をすぎると日がくれかけて、道のぬかるみには氷がはりはじめていた。

しかし、かばんをかたにかけた三郎の心は、うす暗くなっていくあたりの空気とは反対に明るかった。

（おれは、中学へはいるんだ！）

三郎にはほこりがあった。ときは大正八（一九一九）年。三郎のむねには、希望のにじがあかくもえていた。

中学といっても、いまの義務制の中学ではない、五十三人のクラスメートのなかから、わずかに三人しか受験生がない旧制の中学である。クラスの六パーセントにみたない受験者数だった。

三郎のクラスでは、町の郡役所の土木課長を父にもつ英助と、村に一けんだけの、水車をもっている米屋の子の竹子と、三郎の三人だけが受験生。いわばエリートである。

竹子は女学校を受験する。これは女だけにかぎられた学校である。

もうひとり、去年の春、中学の受験にしっぱいした村長の次男の悟が受験する。

悟は三郎より一つ年上で、からだも大きく力もある。三郎のすかない少年だった。

（おれは、中学をでたら東京へいこう。小説家になるんだ！）

三郎は、もう、こうきめてかかっていた。

作文がクラス一である自信と、東京の少年雑誌に詩を投稿して、賞品に銀メダルをおくられたよろこびが、いつも三郎のゆめを山のかなたの東京へさそうのだった。

三郎は、ふと、雑誌に投稿して入賞した詩をおもいうかべて口ずさんでみた。だれに気がねもいらない、だれも見ていない村のでこぼこ道だった。

明るいといっても
黄色な明るさだから
秋の林は　さびしいんだ

そっと　ふみつけても
小さな音をたてる落ち葉だから
秋の林は　さびしいんだ

——秋の林

たしかに雑誌の選者は、ほめて、つぎのように批評してくれていた。「作者は、じっさいに秋の林をおとずれて、秋のさびしさをあじわったのであろう。実感がこもっている。」

三郎はもう一編、やっぱり佳作になった秋の詩を声にしてみた。

虫の鳴かなくなった草原は
空き家のように　さびしいな
だまっている　友の顔は
みぞれのようにつめたい
十一月だ！
黒いぼうしをかむって
ひとり　ぼくは　草原をいく

——十一月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三郎は、たそがれて黒ずんできた赤城山を、南の空にふりあおいだ。
赤城は一八二八メートルの山である。ぐうんと空に、つばさのようなすそ野をながくひいて、でんと男らしくあぐらをかいて、そびえている。

三郎は家にかえってきた。
三郎の家は、村には四、五けんしかない店づくりの平屋だった。
草ぶきの家がおおいなかで、屋根が板ぶきになっている。屋根にうすい小さなわり板をならべ、その板きれが風でとばされないように、たくさん石をのっけてある。
三郎は、こんなおとなのうたを知っていた。

上州名物　なんだんべえ
かかあ天下に　空っ風
みそつけまんじゅう　屋根の石

上州というのは群馬県のことで、むかしはそうよばれていたが、いまでも使われている。
いまあげた五つが群馬の特色である。

なんだんべえ、このべえは上州の方言で、ことばのしりにかたっぱしからつく。「そうだんべえ」「ちごうだんべえ」「うれしかんべえ」。べえは「だろう」という推量のことばである。

かかあというのは、おかみさん（妻）のことで、天下というのは支配権である。おかみさんが亭主よりいばっているのを、かかあ天下という。

空っ風は、冬から春にかけてシベリアから日本海をわたって中央の山脈をこえ、群馬県をはげしくふきまくる季節風で、じつにかわいた、目もあけられない砂ぼこりまみれの烈風である。

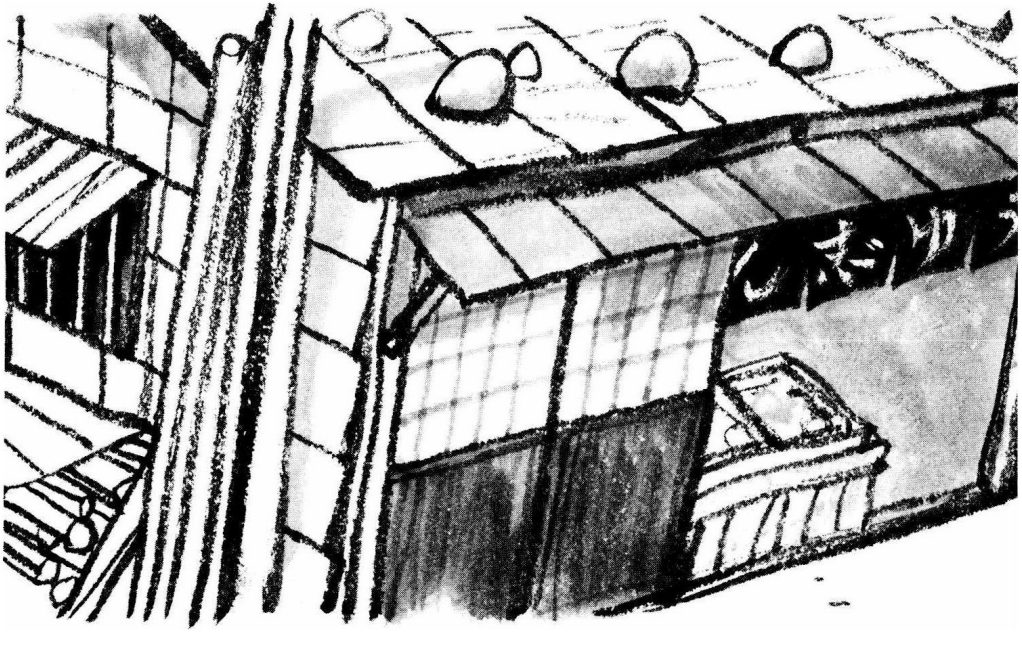
みそつけまんじゅうは、あんのない、スポンジのようなまんじゅうを、くしざしにして、みそをぬってやいたもので味がすこぶるよい。

上州では空っ風をふせぐために、屋根に小さなかぼちゃくらいの石をたくさんのせておく。

三郎の家もそうなっていた。

ただ、この屋根の石は大正時代までで、いまは

すたれて、かわらの屋根にかわっている。
三郎の家は、入り口にしょうじが六まいあるが、これをこししょうじといって、はった白いしょうじ紙には、「おまんじゅう」と、すみでくろぐろと書かれている。
三郎の姉のはつが、このごろ、まんじゅうをつくって売りだしたからである。
このまんじゅうは、なかにあずきのあんこを入れた、ふっくらした白いまんじゅうである。
「さぶ。寒かったべ。早く火にあたれ。」
父の太助が、いろりばたで、たばこをきせるでくゆらしながら、三郎に声をかけた。
三郎より五さい年上の姉のはつは、台所で食事のしたくをしていたが、三さい年下の妹のすえは、父とならんでいろりばたにいた。
あがりがまちの四角ないろりには、ふといまきがくべられて、火があかあかともえていた。
「さぶ。しっかり勉強してくれ。勉強のほうはだ



いじょうぶか。」
「だいじょうぶだとも。おら、きっと中学に合格してみせる。」
「さぶ。村長さんとこの悟さんな、もう新しい自転車を買ってもらってな、学校の庭でけいこしてるだとさ。」
三郎は、姉にいわれるまえに、それを知っていた。
村で倉が二つもあり、資産家で、どうどうとした二階づくりの村長の家だ。そこの次男の悟が新台車とうらやましがられる、ぴかぴかの自転車を買ってもらうことなど、なんでもあるまい。
だが、三郎はそうはいかない。
母が死んでから、手びろくやっていた運送業を父がしっぱいして、父は借財で、いつも債鬼に追いまわされていた。

二

三郎の家は群馬県の北部にあった。
利根川の上流にある沼田町。そこからさらに東へ、会津街道を十二キロほどいったところの白沢村で、俗に宿といわれる高平である。
白沢村から峠をこえると、さらにいくつかの村があり、道はやがて片品、尾瀬、檜枝岐をすぎて会津若松へとつながっている。

宿といわれるだけあって、トラックもない大正時代には、峠のおくから馬の背ではこばれてくる物資を、ひとまず三郎の村におろし、ここから沼田町（現在は市）へ、馬がひく運送車ではこんでいく。

三郎の父の太助は、三郎がうまれるまえから村のまんなかで運送店をいとなみ、ひところは四十台からの運送車と、おおくの運送人夫（運送車をひく人）をとりしまっていた。

そのころ、店は活気がみなぎり、いせいのいい丸山とそめぬいたはっぴをきて、紺のももひきをはいた運送人夫たちが、ねじりはちまきで出入りしていた。

その人たちに入りまじり、母はいつもにこにこと、おおくの人たちに愛想をふりまき、やさしいことばをかけていた。そこで、

「丸山運送店は、お節さんでもつ。」

と、だれかれなしに母をほめた。

父は店さきにしつらえた帳場格子のつくえにむかって、ふでぺいそがしく運送貨物の帳簿をつけていた。

だがそれも、母が死ぬと、がたがたと商売が不振になり、父は借財を山ほどかかえて店をとじなければならなくなった。

「あいつに、にえ湯をのまされて、おらは店をつぶしてしまった。」

父は信じきって片うでとたのんでいた、村会議員の佐々木に大金を使いこまれ、倒産のうきめを見たのである。

「くやしいなあ。うちには金がないんだ。」

ときたま沼田町からやってくる商人ふうなふとった男が、きびしく父に金のさいそくをするのを三郎は見てはらをたてた。

（ようし、おらは百姓になろう。あせにまみれ、日にやかれて、ぶったおれるまで土とたたかうぞ。）

あきらめていた三郎である。

おなじクラスの土木課長を父にもつ英助や、一つ年上の悟のように、中学を受験することなどはのぞみのないことだった。

そんなとき、おもいがけなくすくいの手が、小学三年生のとき担任だった広田道子先生からさしのべられた。

先生は三郎の才能をみとめ、三郎にあたたかく、なくなった母のようにやさしかった。

「三郎は、わたしの子どもよ。」

ときには、そっと三郎の頭をなでてくれた。やさしくいたわり、げきれいしてくれる先生のひとみのなかに、三郎は母のひとみを発見したのである。

三郎は先生をしたって、朝早く登校し、校門のかげに身をひそめて、先生の登校をまち、おはようございます、と声をかけた。

その先生も、三郎が四年生になった春には、峠のむこうの東村（いまの利根村）へかわっていった。三郎は先生のことがわすれられず、夏休みのある日、あつい日ざしのなかを、十二キロの峠の山道をこえて先生に会いにいった。

しかし、皮肉にも会うことができなかった。先生は実家へかえって、るすだったのである。がっかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com